

博士學位論文要約

論文題目： 児童養護施設で育つ子どもへの自立支援の課題
-ソーシャルワークにおけるレジリエンス概念を手がかりに-

氏名： 梅谷 聡子

要約：

本研究の目的は、児童養護施設で育つ子どもが「自己の尊厳を保持し、他者と関わり合い、頼り合うことを通して、社会との繋がりを持つこと」と定義した「自立」に向かうために必要な自立支援の課題を明らかにすることにある。その際、入所時点ですでに困難を経験している児童養護施設で育つ子どもが回復に至るプロセスに着目するために、ソーシャルワークのレジリエンス概念を手がかりとした。

序章では、本研究の背景を示し、社会的養護における子どもの自立と自立支援の概念について検討した。児童養護施設の入所施設としての機能を活かした自立支援を展開するために、本研究では、施設入所から退所後までの一連のケアを通して子どもの自立を促すという立場で自立支援を論じることを示した。また、児童養護施設で育つ子どもの自立支援についての先行研究の検討から、次の3点の課題が明らかになった。1つ目は、個々の子どもや若者の自立の過程で生じるニーズや自立支援の課題をおかれた文脈から明らかにすること、2つ目は、支援者が自立や自立支援をどのように捉え、実践しているのかを明らかにすること、3つ目は、子どもや若者の困難からの回復に着目することである。

第1章では、本研究の考察を貫くレジリエンス概念について文献検討を行い、本研究におけるレジリエンスの定義を明らかにした。レジリエンス概念は、回復のプロセスを個人の内面に求めることによって、困難の背景にある社会の構造的な問題を等閑視する点が批判されている。児童養護施設の子どもの貧困や虐待等の困難の背景には社会の構造的な問題があることから、本研究では、ソーシャルワークのレジリエンス概念を「困難に直面した時、あるいは困難に直面した後に、おかれた社会状況、文化等の文脈において予期される以上の結果をもたらす人と環境の相互作用のプロセス」と定義した。「予期される以上の結果」という言葉については、レジリエンスの「結果」が文脈に依存する点を指摘した Van Breda (2018) の主張を参考とした。

第2章では、児童養護施設を18歳以上で退所した10人の若者を対象に、「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的(ホリスティック)に読み解こうとする質的調査法の一つ(桜井2012:6)」であるライフストーリーインタビューを行い、彼らの語りからレジリエンスについて考察した。その結果、退所者は様々な経験を通して、生活困窮、ネグレクト、暴力被害、施設入所中の理不尽な経験や挫折した経験などの意味づけを再構成していた。とりわけ、暴力を受けていた当時「自分が悪い」、「怒られるのは自分の責任」と思っていたと

語られたストーリーは、その後の肯定的な人間関係の構築や児童福祉の専門的な知識を身につける等の経験によって、親からの暴力が不当なものであるというストーリーや、暴力を振るった家族の背景を相対化して語ろうとするストーリーへと変化していた。

一方で、退所者の語りの中には、現在の生活が充実しているから辛い過去も“結果として良かった”と語ることができ、現在が苦しい状況だったら自分の語り方も変わるだろうというものがあった。比較的安定した現在からライフストーリーを語ると、過去の困難も現在の安定した生活に続く経験であったと意味づけられる。これは、現在の状況から過去は語り直すことができ、語られるライフストーリーが回復の物語であれば、子ども期に虐待等の自身の存在を否定されるような困難を経験した子どもであっても、その後の生活の中で自らの存在や生きることを肯定できる可能性があることを示唆している。

しかし、それは退所者が切迫した状況を等閑視しているためではなく、自立のプロセスにおいて生活の基盤が比較的安定し、信頼できる人間関係を築き、退所者自身が有意義と感じられる様々な経験をしてきたために、回復のストーリーとして語ることが可能になったと考えられる。児童養護施設で育つ子どもへの自立支援は、困難を経験した子どもが自らのライフストーリーを回復の物語として語り直すことを可能にするために、「生い立ちの整理」等の子どもの出自を伝える取り組みと同時に、子どもや若者の生活全体が本人にとって充実したものとして経験されるような支援である必要があると考察した。

第3章では、児童養護施設において子どもの自立支援の一端を担う施設職員が、児童養護施設の子どもの自立に対してどのような支援観（自立観）をもち、どのような支援を行っているかを、施設職員へのインタビュー調査から明らかにした。調査協力者は勤続年数10年以上の児童養護施設の職員であり、分析方法は佐藤（2008）による「質的データ分析法」を参考にした。分析の結果、子どもの被虐待経験等による【自己肯定感の低さ】や、入所中の施設生活と一般家庭の生活の乖離、【退所後の孤立】、児童養護施設で育つ子どもの自立を阻む制度や、社会の多数派の社会的養護に対する認識などが、子どもの自立を阻む課題として挙げられた。こうした状況の中で自立支援を展開する施設職員は、子ども自身が生活能力を身につけたり、精神的に成長することを支援する自立観のみならず、子どもが周囲の助けを得られるように支援する自立観を持っていた。

施設職員が語った子どもの自立の課題からは、児童養護施設の子どもの、幼少期のトラウマや社会的排除状態など複合する逆境の中にあることが示唆された。児童養護施設において行っている自立支援の分析結果では、入所施設である児童養護施設の実践は、多くの一般家庭の子どもがそうであるように、日常生活を通して子どもの自立を促すという役割がある。したがって、児童養護施設における自立支援の内容は、入所している間に子どものトラウマ等傷つきを癒やし、人を頼ることを含めて力を身に付けさせるというものが語られた。一方で、児童養護施設職員が退所後の子どもの生活環境を積極的な調整や、施設の子どもの退所者の困難を代弁するということは頻繁には語られなかった。しかし、子どもの自立の課題に【自立を阻む社会のあり方】が挙げられたように、退所後を見据えた、子どもの生活環境への介入や代弁は非常に重要であると考察した。

第4章では、アフターケアを行う相談員へのインタビュー調査から子どもの自立を促す児童養護施設のインケアについて次のリサーチクエスチョンに基づき考察した。①退所者

はどのような困難に直面しているのか、②退所者の困難の背景にあるものは何か、③退所者はどのような強みを活かして困難に対処しているか、④インケアにおいて子どもの自立を促すために必要な支援とはどのようなものか。調査協力者として、5機関、9名のアフターケア相談員の協力を得た。本調査の協力者の選定は、全国の退所者にアフターケアを行う機関のうち、これまでの支援実績や、実践活動が現在積極的になされているかという点を考慮したうえで、筆者より当該機関に直接調査協力を依頼し、承諾が得られた場合に実施するというプロセスで行なった。分析方法は、佐藤（2008）による「質的データ分析法」を参考にした。

分析の結果、退所者の困難の背景には「退所者自身が有する要因」、「退所後の環境要因」、「自立のプロセスにおける要因」が相互に影響し合っていること。また、児童養護施設の自立支援は、「自立のプロセスにおける要因」に働きかけ、退所後、問題解決に至る強みを強化し、退所後の困難の背景となる要因を緩和・解消する必要性があることが明らかになった。

子どもの自立のプロセスに効果的なインケアについて、分析結果と考察から以下の3点が示唆された。第一に、入所中の日常生活における子どもの主体性と経験の蓄積を基盤とした、生活習慣の習得、社会経験の蓄積、退所後も頼っても良いと子どもが思える関係や、子どもが条件付きでなく肯定される関係の構築等がどれほどなされるかが、退所後の困難や強みにまで影響すること。第二に、虐待や家族分離などの経験により、自らの存在の意味の不確かさ、すなわち生きることを絶対的に肯定された経験の乏しさのある子どもが、自らの生きる意味を見出すことができるようなインケアが必要である。そのために、生い立ちの整理や【日常生活の中で主体性が育まれる】、【職員との信頼関係を築くことができる】が必要な支援であると考察した。第三に、職員の子どもの自立に関する援助観の醸成と社会資源の活用必要性が示唆された。インタビューにおいて職員の入所児童の進学に対する価値観の偏りや、社会資源に関する知識やその活用に関する技術の不足が明らかになった。

以上の3つの調査により、児童養護施設で育つ子どもの自立支援の課題について以下の点が明らかになった。

第一に、子どもと施設職員の「信頼関係」を築くことの重要性である。子どもと施設職員の信頼関係は、逆境経験により大人への不信感を抱いている子どもにとって、安心安全な生活を送ることや、愛着関係の形成を図る機会となる。また、入所中に職員との良好な関係があると、退所後も施設に相談しやすい場合があり、アフターケアの資源として退所者に認識されやすいことが挙げられる。

第二に、地域における自立支援の必要性である。子どもは施設の中だけで自立するというだけでなく、施設外の様々な関係の中で自立していくということが、各調査から明らかになった。すなわち、児童養護施設で育つ子どもの自立は、施設生活を基盤としつつも、学校や職場、近隣住民等、子どもが生活する地域の対人関係によって促されていた。つまり、児童養護施設で育つ子どもの自立支援は、施設内部の資源で完結するのではなく、地域の人々との関係性を活用して行われる必要性が示された。この点において、児童養護施設で育つ子どもへの自立支援は、子どもへのミクロレベルの対人支援にとどまらない、学

課程博士・論文博士共通

校，職場，地域等における人と環境の相互作用に介入するソーシャルワークとして実践される重要性が明らかになった。